

京都府京田辺市

向谷遺跡・魚田遺跡第4次発掘調査概報

-大住地区ほ場整備事業地内の調査 その5-



2002

京田辺市教育委員会

序

本市の北部にある松井・大住地区において、大規模なほ場整備事業が実施されていますが、この区域にはいくつかの遺物散布地が存在しています。

そこで、ほ場整備事業と埋蔵文化財との円滑な調整をはかるための事前の試掘調査を平成8年度から行っています。

今年度は、向谷遺跡と魚田遺跡の調査を行いましたが、向谷遺跡では奈良時代の遺構・遺物がみつかり、集落などが存在していたことが予想されます。

最後になりましたが、今回の調査にあたりましては、土地所有者の方々、関係機関をはじめ多くの方々のご協力・ご指導をいただきましたことをお礼申しあげるとともに、今後とも埋蔵文化財に対しご理解賜りますようお願い申しあげます。

平成14年3月

京田辺市教育委員会

教育長 村田新之昇

例　　言

1 本書は、平成13年度に京田辺市教育委員会が行った向谷遺跡・魚田遺跡発掘調査の概要報告である。

2 本調査は、京都府が計画した大住地区ほ場整備事業にともない、国庫補助事業として実施した。

3 現地調査は平成13年12月27日に開始し平成14年2月20日に終了した。

4 調査組織は次のとおりである。

調査主体……京田辺市教育委員会

調査責任者……京田辺市教育委員会 教育長 村田新之昇

調査指導……京都府教育委員会・京都府立山城郷土資料館・京田辺市文化財保護委員会

調査担当者……京田辺市教育委員会 社会教育課 鷹野一太郎

調査事務局……京田辺市教育委員会 社会教育課（課長 奥西安己）

作業委託……京都遺跡サービス株式会社

5 調査を実施するについて、京都府山城土地改良事務所・京田辺市農業土木課には多大のご協力を賜った。記して感謝します。

6 調査期間中および本書を作成するにあたり、次の方々からご教示を得た。記して感謝の意とします。（順不同・敬称略）

磯野浩光・岸岡貴英・肥後弘幸

7 本書の執筆・編集は鷹野が行った。

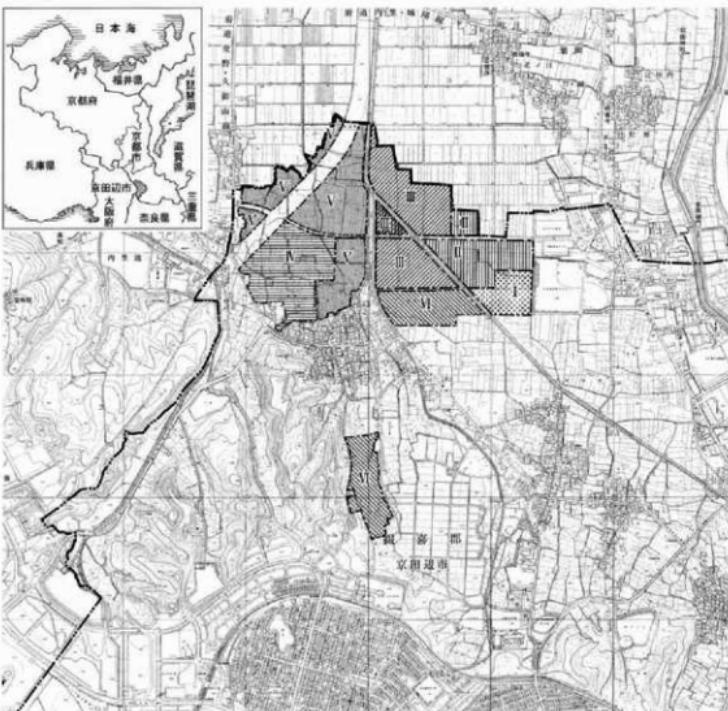
1 はじめに

京田辺市松井及び大住において、府営ほ場整備事業が行われることになり、同地区内に所在する魚田遺跡・新田遺跡等について、ほ場整備事業と遺跡保存との調整をはかるための資料を得ることが必要となった。

そこで京田辺市教育委員会では、京都府教育委員会と協議の結果、ほ場整備事業地内の遺跡について、範囲及び状況等の確認、遺跡保存のための基礎資料作成のため、平成8年度から発掘調査を実施することとした。

今年度は、向谷遺跡・魚田遺跡の発掘調査を行った。

なお、土地所有者の方々をはじめ、関係者の方々、暖冬とはいえ寒中強風のなか作業に従事された皆さん、その他多くの方々の協力によって今回の調査が行われたことをここに記して感謝の気持ちとしたい。



調査位置図 (S = 1 : 20,000)

VI: 今回調査地

2 位置と環境

京田辺市は京都府南部に広がる南山城平野のほぼ中央、伊賀山中に源を発する木津川の左岸に位置する。市の西部は生駒山系に連なる丘陵地帯で、東部は北流する木津川によって形成された沖積平野が広がっている。大阪層群からなる西部の丘陵は起伏が激しく、丘陵から東の木津川に流れる多くの小河川によって開析谷・扇状地が形成されている。またその小河川の大半は東の平野部で天井川化しており、市の景観は独特の様相を呈している。

今回の調査地は市の北端、八幡市との境付近にあたるが、周辺の主な遺跡をみてみると、まず松井集落の南西丘陵にかつては19基以上が確認された松井横穴群が挙げられる。ここから南東の京田辺市薪^{たきぎ}・北西の八幡市美濃山にかけての丘陵地には、松井横穴群のほか、堀切・荒坂・女谷・美濃山・狐谷の各横穴群が分布している。近年、女谷・荒坂横穴群の一部が発掘調査され、驚くほど多くの横穴が埋没していることがわかり、近接した2~4基で小群を構成すること、盛土による追葬方法が確認されるなど多くの成果が得られたほか、ヘルメットを逆さにしたような特殊な形の土師器の杯等がみつかった。これら横穴群は6世紀末から7世紀前半にかけて築造されたものである。

松井集落の北側には新田遺跡が広がる。ほ場整備事業にともなう平成11年度の発掘調査で飛鳥・奈良時代の集落跡が確認された。飛鳥時代の縦穴住居が奈良時代に掘立柱建物へ変わること、集落内に大溝があり、それが現在松井集落の北側に接してみられる川跡とは並行することなどがわかった。またこの集落跡の北東部では平安時代の遺物が大量にみつかっているほか、第2京阪道路の北側でも飛鳥時代の遺物が集中する箇所がある。

今回の調査地から約1.3km南東に、大住車塚古墳・大住南塚古墳が存在する。前者は周濠をもつ前方後方墳として古くから知られ、昭和49年(1974)に史跡指定を受けている。その南西に隣接する大住南塚古墳は前方後円墳と考えられてきたが、当教育委員会による発掘調査で埴輪・葺石等がみつかり、4世紀後半に築かれた、大住車塚古墳と同じく周濠をもつ前方後方墳であることが明らかとなった。これにより、周濠をもつ前方後方墳が2基並ぶという全国的に珍しい形態であることが確認された。

そのほか、今回の調査地である向谷遺跡の西側丘陵にはこのあたりではめずらしい源訪神社があり、近辺の式内社では松井の天神社(本殿は京都府登録文化財)・大住の月読神社がある。天神社は二間社の本殿で、近年彩色が復元された。月読神社には、毎年10月14日、大住隼人舞が同保存会により奉納されている。また、大住車塚・南塚古墳の南東、岡村の集落には元文5年(1740)に建てられ、重要文化財に指定されている澤井家住宅が存在する。

このように調査地を取り囲む歴史の層は厚い。



1. 向谷遺跡 2. 魚田遺跡 3. 新田遺跡 4. 相合遺跡 5. 西村遺跡 6. 門田遺跡 7. 松井横穴群
 8. 大住車塚古墳 9. 大住南塚古墳 10. 口仲谷古墳群 11. 大住城跡 12. 城山古墳群 13. 内山古墳
 14. 交野ヶ原室跡群 15. 松井窓跡群 16. 虛空藏谷遺跡 17. 猿谷(小谷)遺跡 18. 郡土塚古墳群
 19. 烟山古墳群 20. 烟山遺跡 21. 西山古墳群 22. 菴遺跡 23. 堀切古墳群・横穴群
 24. 内里五丁遺跡 25. 内里八丁遺跡 26. 狐谷横穴群 27. 王塚古墳 28. 美濃山横穴群
 29. 美濃山廃寺跡 30. 女谷横穴群 31. 芦坂横穴群

周辺主要遺跡図 (S = 1 : 25,000)

3 調査経過

府営は場整備事業の対象となったのは、京田辺市松井から大住にかけての約87haであり、平成8年度から発掘調査及び区画整備が行われている。今回の調査は向谷遺跡及び魚田遺跡で行った。

向谷遺跡は松井集落の南側に位置し、集落の南西部を北に伸びる丘陵の東側の斜面と裾部、南北に細長い部分が対象地となった。魚田遺跡は松井集落の東側に位置し、こちらは平地である。

現地調査は平成13年12月27日に着手、トレンチの掘削は年が改まった平成14年1月17日から開始、2月20日に終了した。

調査はまず向谷遺跡から着手、遺跡地内に3か所程度のトレンチを入れ、その後魚田遺跡に移り、20数か所のトレンチを入れるという予定で進めたが、向谷遺跡で奈良時代の遺物包含層がみつかり、さらに遺跡地外にもトレンチを増やす必要が生じた。このため、関係機関等との協議の間に魚田遺跡で7か所のトレンチを調査、その後再び向谷遺跡の調査を行った。結果的に向谷遺跡は33か所を調査した。

調査はすべて人力で行い、トレンチの大きさは2m×2mを基本に深さ1m程度の掘削を行い、遺物の有無、土層の観察に努めたが、向谷遺跡では数多くのトレンチを入れるために2mに満たない小さなものも多い。

向谷遺跡では、奈良時代の遺構・遺物が高い場所から低い場所まで多くの地点でみつかり、集落等の存在がうかがわれる。

魚田遺跡では、木津川の洪水による砂の堆積や伏見地震によるものと考えている噴砂の跡がみつかった。



向谷遺跡（南から）



魚田遺跡（南から）

4 調査概要

(1) 向谷遺跡

向谷遺跡は松井集落の南側にあり、これまでに土師器片が採集され、散布地として知られているだけ内容等は不明であった。

調査は前述のように当初計画を大きく上回る33か所のトレンチを設定し行った。調査対象地は丘陵東斜面及び裾部で、南北に長い。

東西幅約140m・南北長約420mの範囲である。斜面地ゆえに段差のきつい水田、畑地でかんがい用の池が点在する。この池は個々人のものとなっている。その他、果樹園・竹林などもみられる。

なお、調査地の東側には南北の道路があるが、この道路は堤防の上にあり、集落に近づくと大きく東へカーブする。このカーブの部分では高さ約5mほどの堤防となっている。これは東側を流れる虚空藏谷川（かつては天井川）による水害から村を守るために何時の時か造られた堤防である。

調査はまず中央部、次に南部、最後に北部へとトレンチを設定していく。

調査地の最高所は南西部で31.08m、最も低い北端で17.50m、南端では27.97mをそれぞれ測る。

南部では、5・6トレンチで奈



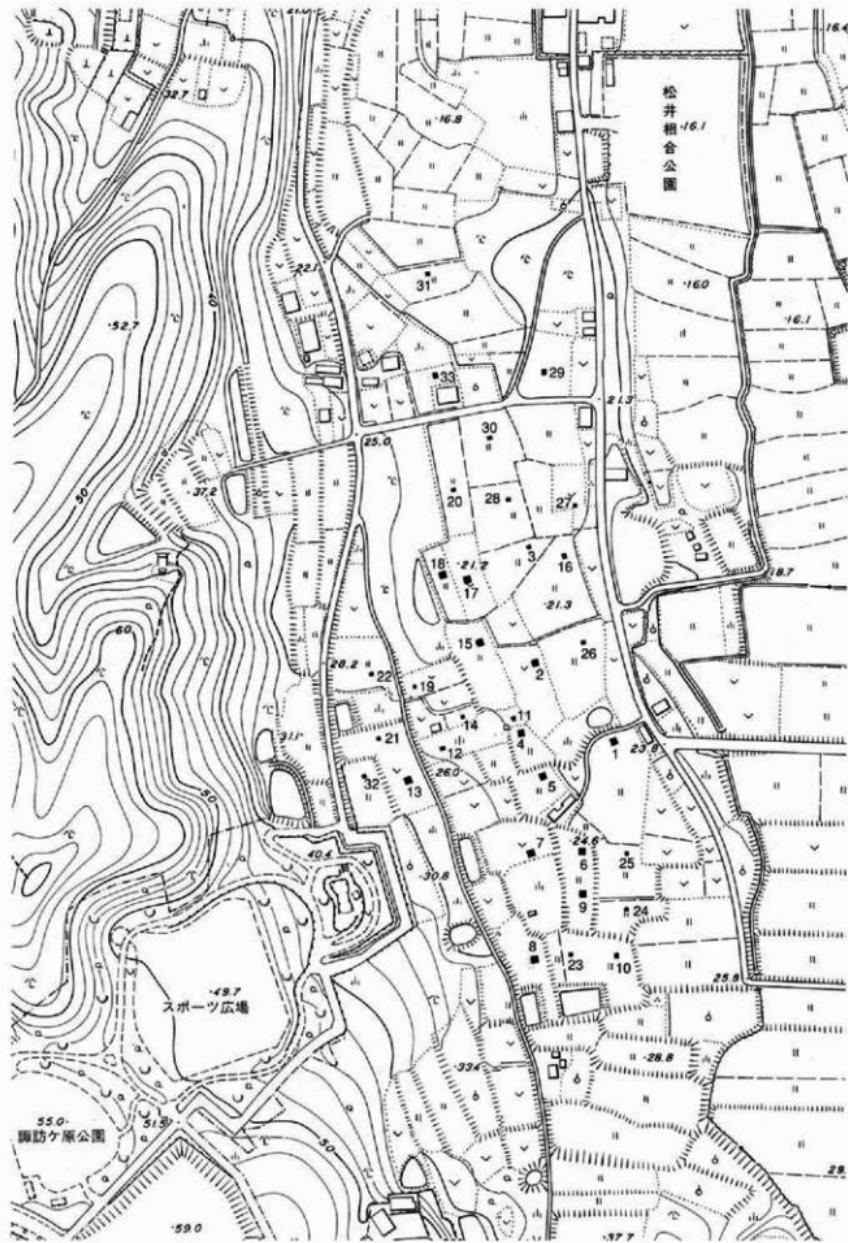
調査風景（右5トレンチ、南西から）



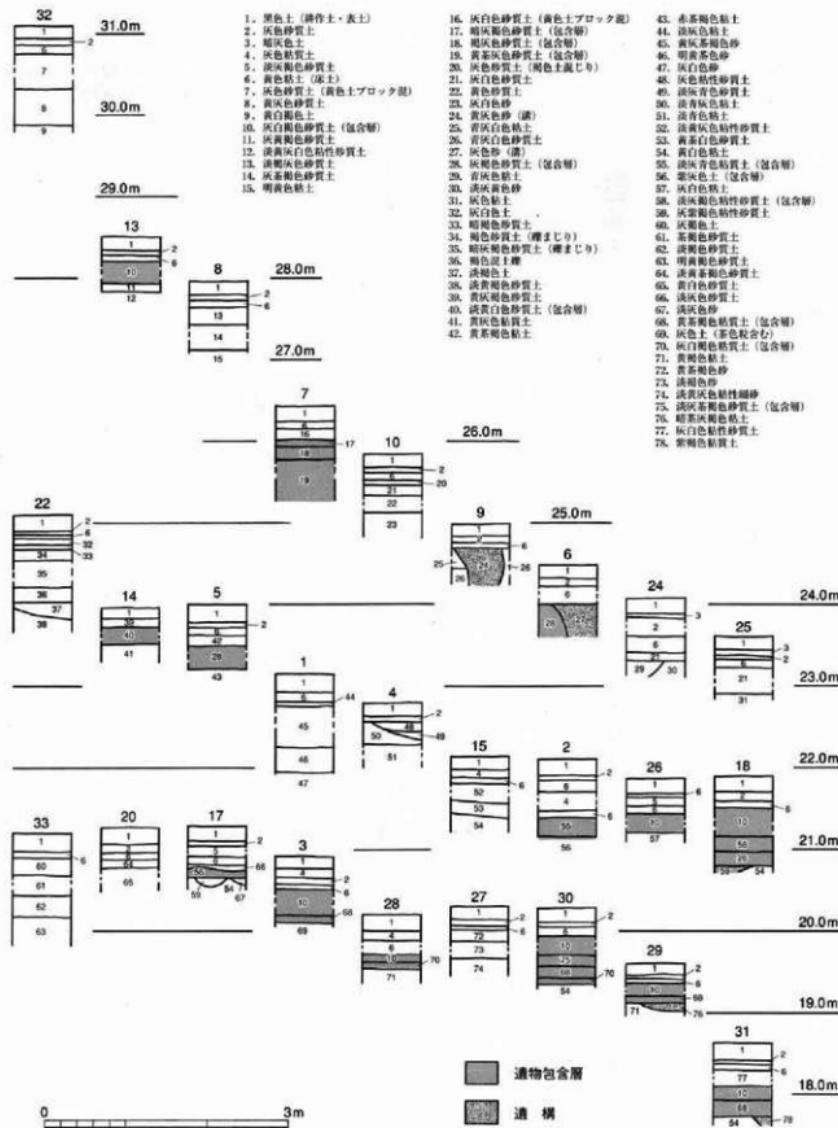
調査風景（1トレンチ、北東から）



松井集落南側の堤防（南西から）



向谷遺跡トレーンチ配置図 ($S = 1 : 2,500$) 上が北



向谷遺跡トレンチ土層略図（上の数字がトレンチ名）



5トレンチ（南から）



13トレンチ（南西から）



17トレンチ（南から）



29トレンチ（南東から）

良時代や鎌倉時代の遺物包含層がみつかり、6トレンチでは、包含層を切り込んだ溝がみられた。一段高い7トレンチでは鎌倉時代かとみられる包含層がある。南側のさらに一段高い8トレンチでは、江戸時代以降に造成され水田になったことがわかった。1トレンチでは、砂が1mほど堆積し根株が何本かみられた。

中央部は東西方向の段差がきつく、100mで10mの差がある。南西端の最高所に設定した32トレンチは0.7m以上盛土されているが、盛土の中に須恵器片が含まれていた。東側の一段下の13トレンチは奈良時代の遺物包含層があり、さらに東側12・14トレンチは、表土のすぐ下が奈良時代の遺物包含層で、12トレンチでは溝、14トレンチではピットがみつかった。12トレンチの南側は果樹園であるが、多くの奈良時代の土器が散布しているのを探集した。この一段下の4・11・15トレンチは水田造成の際に削平を受けたとみられた。2・3・16・18・30トレンチは、中世・奈良2層以上の遺物包含層があり、ことに30トレンチの奈良時代包含層はたくさんの遺物を含んでいた。18トレンチでは奈良時代の落ち込みがみつかった。17・26・28トレンチでも包含層があり、17トレンチで奈良時代とみられる溝をみつけた。西の22トレンチ付近は谷地形だったとみられ、1m以上の堆積土があった。一方その北東20トレンチ付近は丘陵張出し部だったとみられる。この20トレンチのすぐ西側がかかつての松井の「牛まわし」である。東の27トレンチは耕作土下すぐに砂となった。

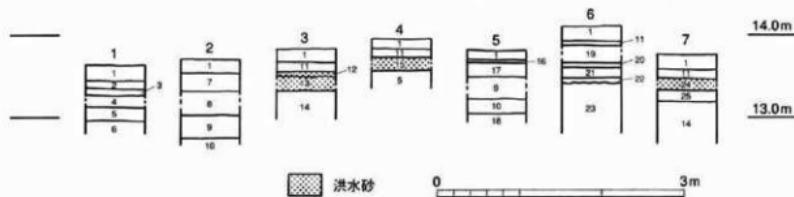
北部の29・31トレンチでも奈良時代の落ち込みがみつかった。

(2) 魚田遺跡

魚田遺跡は松井集落の東側一帯から北東の八幡市にかけて広がる遺跡で、今回と一連のは場整備事業にともない、これまで八幡市境から今回の対象地までの間を対象に3回の調査を行った。その調査では、伏見地震（1596年）によると考えられる噴砂や広い範囲で明治29年（1896）の木津川の洪水によると考えられる砂の堆積がみつかっている。



魚田遺跡トレンチ配置図 ($S = 1 : 2,500$) 上が北



- | | | | | |
|-------------|------------|-----------------------|-------------|-------------|
| 1. 黒色土（耕作土） | 7. 黄緑色粘性細砂 | 13. 黄灰色粘質土・黄
灰色砂瓦層 | 17. 淡灰褐色細砂 | 22. 灰青緑色砂質土 |
| 2. 暗灰色粘質土 | 8. 灰色粘性細砂 | 18. 茶褐色粗砂（噴砂
層） | 19. 灰色砂質土 | 23. 茶褐色粗砂層 |
| 3. 淡灰色細砂 | 9. 黄緑色粘性細砂 | 14. 灰色粘土 | 20. 茶褐色粘質土 | 24. 灰色砂 |
| 4. 茶褐色粘性細砂 | 10. 青灰色細砂 | 15. 青灰色砂質土・灰茶
色砂瓦層 | 21. 黄褐色粘性細砂 | 25. 灰色土 |
| 5. 灰青色粘性細砂 | 11. 暗灰色砂質土 | 16. 茶褐色砂質土 | | |
| 6. 灰青色粘土 | 12. 淡白色細砂 | 17. 淡灰褐色細砂 | | |

魚田遺跡土層略図（上の数字がトレンチ名）

今回の調査対象地は府道富野莊・八幡線と幹線排水路（防賀川）に挟まれたかなり広大な部分であるが、向谷遺跡に調査の重点を置いたため、虚空蔵谷川にかかる府道の古松井橋の北から北東部分に7か所のトレンチを設定したのみである。地形はほぼ平坦であるが、西から東へやや高まっていく。標高は1トレンチで13.63m、4トレンチで13.96mを計る。なお、府道の東約150mに府道と平行する小道やあぜがあるが、この道を境に東側は一段低くなる所が多いこと、他の水田のあぜと方位が異なることから何かを示すものではないかと注目される。

東側の3・4・7トレンチでは、耕作土下すぐに洪水による砂の堆積がみられた。

2・5トレンチでは噴砂がみつかったが、これまでにみつかっているものよりも砂脈の幅も広く本数も多い。砂は地表下0.4~0.5mでみられた。

6トレンチでは地表下0.7mで小石まじりの粗い茶褐色砂になった。砂の厚さは0.6mまで確認した。高い場所ではあるが、かつておそらく木津川の川原だったと考えられよう。この粗い砂は2・5トレンチでみつかった噴砂の砂と同じ砂である。



1 トレンチ（南東から）



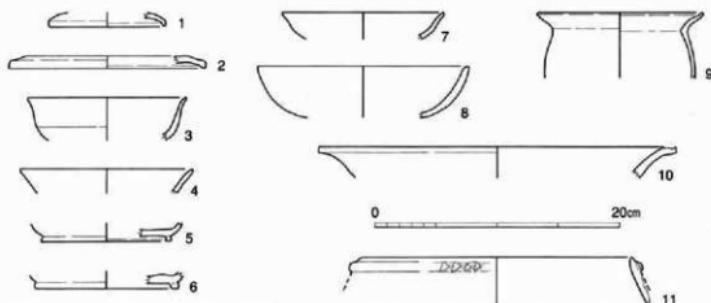
3 トレンチ（南東から）



5 トレンチ噴砂（南西から）

5 遺 物

今回の調査でみつかった遺物は、2遺跡あわせて40か所のトレンチからすると量的に少なく、整理箱1箱に満たない。また、小片が多く図化できたものも少ない。以下遺跡ごとにみてみることとする。



向谷遺跡：1～10 猶患器フタ（1・2） 猶患器杯（3～6） 土師器杯（7） 土師器椀（8） 土師器カメ（9・10）
2トレンチ（2・4・6） 5トレンチ（3） 14トレンチ（8） 18トレンチ（5） 29トレンチ（9） 30トレンチ（1・7・10）
魚田遺跡：11
繩紋土器遺跡（11）
6トレンチ（11）

遺物実測図

向谷遺跡（1～10）

多くのトレンチから須恵器・土師器・瓦器・陶器・磁器などがみつかった。時代的には奈良時代から江戸時代までのものがあるが、多いのは奈良時代のものである。

1は30トレンチ、2は2トレンチからみつかった須恵器のフタである。3は5トレンチ、4は2トレンチの須恵器杯、5は18トレンチ、6は2トレンチの須恵器杯Bである。

7は30トレンチからみつかった土師器の杯、8は14トレンチからみつかった土師器の椀である。9は29トレンチからみつかった土師器のカメである。内外面とも表面剥離のため調整不明である。10は30トレンチからみつかった土師器の長脣のカメである。

これらは概ね8世紀、奈良時代のものとみられるが、6は高台が底部外側屈曲部に付きやや新しいものともいえよう。

なお、3・16トレンチから埴輪かともみられる、厚手の素焼きのものがあるがよくわからない。

魚田遺跡（11）

各トレンチから中世を中心とした遺物がみつかったが、図化したのは縄紋土器である。

11は6トレンチのかつての木津川の河原とみられる砂層からみつかった縄紋土器の深鉢である。外面の口縁端部からやや下がったところに断面D字形の凸帯を貼り付け、▷状の刻みを施す。晩期の船橋式に属すとみられる。

6 まとめ

今回の調査は松井集落の南と東で行った小規模の範囲確認調査であり、調査対象地の広さからみれば、極めてわずかしか調査はできていない。概要是これまで述べてきたとおりであるが、以下遺跡ごとに気づいたことをまとめてみたい。

(1) 向谷遺跡

今回が初めての調査であった。わずかな面積の調査ではあったが、奈良時代の遺構・遺物が多くトレンチからみつかり、このことは大きな成果であったといえよう。遺構・遺物がみつかったのは、南端部とその北東部を除く南北約300mの範囲で、比高差は10mある。東西はほぼ対象地と同じである。遺跡の範囲



向谷遺跡近景（東から 手前16トレンチ）

であるが、南側を除き対象地のさらに東・北・西へと広がることが考えられる。ことに西側は、今回の最高所のトレンチで盛土からみつかった遺物が注意され、これにより、さらに西の丘陵部にまで遺跡の区域が拡大されよう。

奈良時代の遺跡というと、近くでは松井集落の北側でみつかった新田遺跡がある。そこでは集落跡がみつかり、いわゆる畿内でも他地域と異なり飛鳥時代の縦穴住居群が奈良時代に掘立柱建物群にかわるということが確認されている。

では、今回みつかったものは何なのか。残念ながら今回の調査だけでは判断しにくい。比較的平らな部分では、集落跡かとも考えられるが、かなりの斜面の丘陵地にも広がりをみせ、その丘陵斜面では現在のところ平坦地はみられない。とりあえずのところは、集落跡らしいとしかいえない状況である。

(2) 魚田遺跡

7か所のトレンチのみであったが、今回で4回めの調査となった。

明治29年（1896）8月の木津川の大洪水によるものと考えている砂の堆積は、調査地の北東側3・4・7トレンチで確認された。北西から南東方向のラインが想定できる。

今回も噴砂が2・5トレンチでみつかったが、過去の調査でみつかったものが幅1cmに

も満たないことと比べると溝の幅も広く、格段に大きいことがいえる。また、みつかる高さも表土下0.4~0.5mと高いレベルでみつかった。

6トレンチでみつかったかつての木津川と考えられる河原は標高13.4mである。このトレンチの北々東800mで以前確認した河原の標高は13.0mである。

2地点とも同時期と単純にはいえないかも知れないが、このような資料の積み重ねにより、かつての景観復元も可能となろう。

これまでの調査同様、顕著な遺構・良好な遺物包含層はみつからなかったが、これまでの調査とあわせて考えることで、新たな疑問等も生まれてくる。この魚田遺跡については、来年度も調査が予定されている。



魚田遺跡近景（東から 手前6トレンチ）

報告書抄録

ふりがな	むかいたにいせき・うおたいせきだい4じはっくつちょうさがいほう							
書名	向谷遺跡・魚田遺跡第4次発掘調査概報							
副書名	大住地区は場整備事業地内の調査 その5							
巻次								
シリーズ名	京田辺市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第33集							
編著者名	鷹野一太郎							
編集機関	京田辺市教育委員会							
所在地	〒610-0393 京都府京田辺市田辺80番地							
発行年月日	2002(平成14)年3月29日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
向谷遺跡	京田辺市 松井向谷	26211		34度 50分 15秒	135度 44分 15秒	2001年 12月27日 ~ 2002年 2月20日	82m ²	農業関連 (府営は場 整備事業に 伴う事前調 査)
魚田遺跡	京田辺市 松井向井 ほか			34度 50分 40秒	135度 44分 40秒		28m ²	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
向谷遺跡	集落跡	奈良時代	溝・落込み	須恵器・土師器				
魚田遺跡	散布地	-	-	繩紋土器			伏見地震による 噴砂	



平成14年3月28日 印刷

平成14年3月29日 発行

向谷遺跡・魚田遺跡第4次発掘調査概報

-大住地区は場整備事業地内の調査 その5-

(京田辺市埋蔵文化財調査報告書第33集)

編集・発行 京田辺市教育委員会

〒610-0393 京都府京田辺市田辺80番地

電話 0774-62-9550

印 刷 明新印刷株式会社

〒630-8141 奈良市南京終町3丁目464番地

電話 0742-63-0661